

---

# IS インフィニット・ストラatos 妹で介入？！

杉宮 薫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラatos 妹で介入？！

### 【NZコード】

N7620X

### 【作者名】

杉富 薫

### 【あらすじ】

転生先はインフィニット・ストラatosの世界？！

主人公の秋奈は5人のヒロインと切磋琢磨しながら、日々成長していく・・・・そんなお話を

## キャラ設定

主人公

名前 織斑 秋奈

I S名 黒祓（くろもみじ）

姿 デート・ア・ライブの夜刀神十香にそっくり

性格 ユニーク&一夏だけには厳しいよつ！

能力 サーヴァント召喚・・・本当にサーヴァントを召喚するのではなく、自分の体やI Sにその召喚したサーヴァントの身体能力などを附加させる程度のもの。宝具も召喚できるが、一部の宝具の効果は弱くなっている。

生前 人のためだけに生き、自分を捨てて生きていた。

オリキャラ

生徒

名前 瀧馬 枝里

I S名 魔女の夜（ナイト・ウイツチ）

姿 髪が長く、文学少女っぽい雰囲気

性格 基本静かでおしとやかだが、戦闘になると戦闘狂のようになる。

教師

名前 霧ヶ峰 和実

姿 髪が短く、すらりとしたスレンダー

性格 千冬につぐ厳しさ

## キャラ設定（後書き）

これからよろしくおねがいしますっ！！

**第零話 僕の死、私の始まり（前書き）**

ぬいじくおねがいしますっ！！

## 第零話 僕の死、私の始まり

……………！」は、どこだ？

たしか俺はあのときバスに跳ねられて……………っ！

「クソオ……………っ！」

俺の頬から熱い涙が流れた。

「まだ、なにも出来てなかつたのによ……………っ！」

「なにが出来なかつたの？」

不意に後ろから掛かる声。

「だ、誰だ！？」

「私？私は  
すつごく可愛い万能女神エリスだけど？」

「……………」

俺は無言で変な女から距離をとる。……………いや、女神？

「おーー！」

「なにかしら？」

「なんで俺は死んだんだ？」

「……………お」

「あ？なんだ？」

「私がドジったから死んだのよつ……」

「……………あ？！」

「いま何て言つたコイツ？！俺が死んだ理由がコイツがミスつたから  
だとか聞こえたぞ！？」

「……………おい」

「わ、私だつて悪いと思つてるんだからつ！だから、もう一度人生  
を与えてあげるわ！」

「本当に、か？」

闇の中に見えた微かな光を追いかけるように俺はエリスに問い合わせ  
る。

「ええ、好きな世界にね」

「なら

HISの世界で頼む

俺は生前好きだった小説の世界を選択する。

「あとはえーっと・・・なにか能力付けられるけど、どうする?」

「なんでもいいのか?」

一瞬考える、がすぐに思い立つた。

「なら、『サーバアント召還』で頼む」

「細かく設定できるわよ。」

「それなら召還できるのはサーバアントの身体能力と宝具のみにしてくれ・・・・・・・ってこれじゃあ降靈か?」

俺が考えるような素振りをしてみると、

「いや大丈夫・・・だと思つわ。指摘されない限りね」

「指摘・・・まあいい。早く転生させてくれ」

「わかったわよ。性別は女にしどこてあげるから頑張りなさい」

エリスが言い終わつた瞬間に俺の視界はブラックアウトした。

俺が、いや私が目を覚ましたとき赤ん坊になつていていた。それからの生活にちょっとびり期待を抱いていた私がいた。そして、こ

## 第零話 僕の死、私の始まり（後書き）

どうでしたか？短いのは・・・・・勘弁してくれませんか？え？駄目？・・・・・しょ、しょうがないじゃないですかー！学校とかあつて執筆時間があまりとれないんですねよう・・・。

感想などよろしくおねがいします・・・

## 第一話 始まりはいつも突然に（前書き）

よろしくおねがいします！

## 第一話 始まりはいつも突然に

転生してからの私の人生は、転生する前の私の人生とは180度真逆な人生だつた。

しかも千冬姉に稽古をつけてもらつていたからかどうかはわからないけど、わたしは日本の代表候補生に選ばれ専用機は束さんからプレゼントとして『黒桜《くろもみじ》』を貰つた。

…………私、こんなにエリート街道まつしぐらでなにか不幸なことは起きないんだろ？

いや、私だってなにも起きないことを信じたいよ！？でも前世がアレな人生だつたから信じられないんだよ！…どうすればいい、私！！

とかなんとか考えつつ、私はIIS学園の廊下を歩く。

「えーっと、1年1組はあー…………つとあつたあつた」

1年1組の扉の前に立つ。呼吸を整える。

私はとある事情…………まあ束さんに巻き込まれていた事件の所為でIIS学園への入学がすこしづかり遅れてしまつていた。でも大丈夫！まだ時期的にクラス対抗戦はやつていなのはず！いちばん最初の楽しそうなイベントを見逃してたまるか！！

『おい、中に入れ』

中から担任の先生と思われる声が聞こえてくる。よしつ！

「はい、失礼します」

扉を開けて教室内に入る。すると一番最初に見えたのは、

「織斑秋奈です、訳があつて入学が遅れて今日から皆さんと一緒に  
つて一夏兄？！それに千冬姉に篝ちゃんまで？！？」

バージーン！！

「ここでは織斑先生と呼ぶように、いいな織斑  
れじゃあ被つてしまふかなら・・・・・秋奈。いいな？」

一夏兄はこの前二コースがやつてたからわかるけどなんで千冬姉と  
篠ちゃんがここに?

じきあ席は・・・・・一番後の席が空いてるからそこ座れ

「はい、わかりました。」

『あの娘織斑君とどうゆう関係？！』

一 夏兄つて呼んでたつてことは妹？！」

『織斑君って妹もいたの？！』

なんか周りからすっごく視線を感じるなあ…………。何気なく

隣を見ると金髪のお嬢様っぽい人がこっちを見て、

「私セシリア・オルコットといいます。どうぞお見知りおきを」

「いらっしゃりや、よろしくお願ひしますね~」

うんうんいい人そうで良かつた・・・・・・ってセシリア?...どうしようこきなり原作キャラと交友関係築いたらよ私?...!

「分からぬ」とがありましたらこのイギリス代表候補生の私に何でも聞いてください!...」

「へへイギリスの代表候補生なのね~」

うん、知ってる知ってる。イギリス代表候補生ってところはもう原作読んでるから常識として知ってるからそもそもどうでも良かうな態度をとるとセシリアが、

「な・・・・・・つーなんですのその態度はー」

まあ怒るだらうとは予想してたよ、それがセシリアだもんね。

「だつて私日本の代表候補生だからあんま珍しいもんでもないしねえ?」

「あら、あなたも代表候補生でしたの?・・・・・・・そうですわ!...」

「なんだかセシリアのテンションがすっごく上がってるなあ・・・  
・・・なんでだろ?」

「私と一緒にクラス対抗戦に出ません」とへー。」

「はあ？！」

「どうゆうこと？！クラス対抗戦って代表一人だけが戦うんじゃないの？！？」

「それにしても今年からクラス対抗戦のルールが代わって戦争形式になるなんて思いもしませんでしたわ」

「ぐ、えーそつなんだあ」

「今年からルールが変わったなんて聞いてないよ？！しかも戦争形式つて？！総力戦をするの！？」

「どんなルールになつたの？」

意を決して聞いてみるとセシリ亞は一瞬キヨトンとしたあと、

「ああ、知らないんでしたわね。今年から、代表だけではなく代表を含め5対5で対決することになりましたの」

「へえ、そつなんだ・・・・・・でもさあそれってE.Sの数足りないんじゃない？」

「そこには訓練機や教師達で対応するやつですわ」

「ふうん、でもそれなら専用機持ちが圧倒的に有利じゃない？」

「そういえばそうですね……なにか制約が付くのでは  
ないでしょうか？」

制約、かあ。私の場合『サーヴァント召喚』があるから制約もあつたもんじゃないと思うんだけど……。まあ使う機会自体今回は束さんが作ったごついエス以外なさうだけどね。

「まあ、や二じへんはあとから考へない?」

「そうですね。今私たちが考へていても何も変わりませんもの」

「ん? そういえば」のクラスの代表って誰なの?

「クラス代表ですか? 一夏さんですわよ?」

「へえ一夏兄が…………ってええ……そうなの?」

ドスツ!

千冬姉が教卓からいつの間にか私の後ろに来て、ありがたいチヨップを私の首筋にくれた。

「おおおおお…………」「

「さつきから少し五月蠅いぞ、秋奈。 静かにしり」

「は、はい……」

気配が無かつた所為で威力を受け流すことも出来なかつた……。  
・、コレが姉のすることなのかなあ?

ドスッ！

「ぐだらん」と考へるな

「すいません・・・」

何で考へてることが分かるのこの人は・・・・。そして何気なしに前の空中投影ディスプレイを見るとなやつかりクラス対抗戦のメンバーに私が加えられていた。

「クラス対抗戦のメンバーになつた人は放課後特別訓練があるので第一アリーナに集合してぐださいねー！」

山田先生がそう言つた瞬間チャイムがなり朝のHMが終了した。

## 第一話 始まりはいつも突然に（後書き）

薰「作者とつ！」

秋「秋奈のつ！」

薰&amp;秋「後書きコーナー（仮）！」

薰「つてことで唐突に始まつたこのコーナー。ただ単に私と秋奈が喋るというだけの「コーナーです」

秋「どうして（仮）がついてるの？」

薰「はい！今回のテーマがそのことについてだからですっ……」

秋「てーま？」

薰「今回は初めてだから（仮）を付けました。実際、コーナー名が浮かびません」

秋「キャラの名前は浮かぶのにね」

薰「なので今回いきなりですが、これいいんじやね？的なコーナー名を募集しようかなと思つたわけですよ」

秋「他人任せですか・・・・・・」

薰「そして募集したものの中から三つに絞込み、さらに皆さんに投票してもらいたいなあ・・・・・・と思つたんですつー」

秋「…………」

薰「だ、だつて、思いつかなかつたんだもんつ……しょうがないじ  
やん！」

秋「ハア…………とにかく、こんな駄目な作者の為にコーナー  
名を考えてくださいにお願いします」

薰「お願いしまーす……あ、コーナー名案は感想に書いてください  
再びお願ひしますつ……ではつ……」

## 第一話 唐突すぎる開戦（前書き）

更新遅れましたっ・・・・・  
宜しくお願いします。

## 第一話 唐突すぎる開戦

放課後

「うわっ！作者ホントに授業とかすつ飛ばしたよ？！確かに普通の授業とかなら飛ばしてもいいと思つけど、使つた授業とかもあつたのに・・・。」

「は～い皆さん集まつてますか？」

「集まつてゐならE-Sを展開しろ」

山田先生はE-S展開状態で、千冬姉はジャージ姿でアリーナで待つていた。

「先生、一体何をするんですか？」

篠ちゃんが手を上げて質問する

「は～い、今年からのクラス対抗戦が5対5の形式でやることになりましたのは知つてますよね？」

山田先生は笑顔で質問に答えた。

「知つてますが、それが何か・・・・？」

「対戦形式の中にタッグマッチがあるんです。だから今日はそのタッグマッチに出場する選手を決めようと思いまして・・・・。」

「

なるほど、そうゆうわけか。」ここで即席タッグを組んで一番コンビネーションが取れていたコンビを出場させると……でもそれなら

「でも先生、誰と戦うんですか？」

そり、問題はこの場の誰と戦うかだ。即席タッグ同士を戦わせても私やセシリ亞みたいな代表候補生はともかく最近EISに初めて触った一夏兄や篠ちゃん、そしてクラスメイトの鷹月さんは操縦技術が拙い。

「それなら心配は要らない。あともつひとつで来る筈なんだが

「

「センパーアイ……遅れましたー……！」

先生と思われる髪の短いスレンダーな女の人が走ってきたと思ったら、いきなり千冬姉に抱きついた。

「「なあー?」

千冬姉の性格を知っている私と一夏兄はその様子を見て驚く。だって、あの束さんだつて抱きつこうとしてアイアンクローリー極められたんだよ?—この光景はある意味でレアだよレア!—

「霧ヶ峰離れる暑苦しい」

「イタイイタイイタイ!—」

しかしその瞬間アイアンクローラーを極められ地へと伏してしまった。・  
・・・・・・・・・・・・なんなんだろ?この人?

「紹介が遅れたな、コイツが霧ヶ峰。私の後輩だ」

「ん?ああ、そういうえばこの新兵『ルーキー』達の相手をしてくれ  
つて話でしたね?」

「分かったなら早く準備しろ馬鹿」

「わっかりました!#!」

・・・・・・・・・なんか、嵐っぽい人だなあ。ちょっと更識  
さんに似てるかもしね。

「じー・・・・・・・・・・(やつぱり似てるなあ先輩と・  
・・・・)」

ん?なんか霧ヶ峰先生から見られてるような気がするのは気のせい  
かな・・・・・・?

「早く行け馬鹿」

「うおう?!わかりましたからアイアンクローラーだけは止めてください  
お願ひしますつーーー!」

千冬姉に言われて正気になつたのか、すぐに準備を始める。

「えっと、先生・・・・・・・?」

「もしかしなくてもそうだが？」

わお・・・、教師タッグか。いいねえいいねえ。今回『サーヴアン  
ト召喚』を使うのは束さん製作の謎のISだけかなって思つてたけ  
ビレベルによつては使う機会があるかも・・・・・・・！

「それじゃあ組み分けだが……、よしオルゴジトと秋奈お前たちが出ろ」

「わかりました」

「はい、わかりましたよーーー！」

「じゃあ準備が出来次第練習試合を始めるから、HISを展開しておけ」

「「わかりました」」

心中で自分のIS、黒桜《くろもみじ》を呼ぶ。すると左手首の黒いガントレットが光り始め、次の瞬間には展開が終了していた。

「それが、秋奈さんのISですか？」

「うん。・・・・・で、それがブルー・ティアーズ?」

「あら、知つてましたの？そう、これが私のエスブルー・ティア

」

「では、始めるべーー。」

セシリ亞がエリカを言つて終える前に集合がかかる。行かないとな。

「用意はいいな？・・・・・・では始めーーー。」

「よしーーじゃあこいつを出すかあーーー。」

私は『令』がかかると同時に高周波ブレード『虚櫻』《うづるぎ》『ひづるぎ』を霧ヶ峰先生に切りかかる、がしかし。

「甘いー。」

霧ヶ峰先生は後ろに瞬時加速《イグニッショノ・ブースト》をすると訓練用ショットガンを呼び出し、こちらへ連射してくる。それを間一髪のところで横に飛び回避することができた。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・動きを見る限り、まず千冬姉が指導したのは間違いないね。

「ふう・・・・危ない危ない」

「チツ・・・・外したか。でもまあいいかな」

霧ヶ峰先生はチラツとセシリ亞と山田先生のほうを見ると不敵にニヤリと笑った。・・・・・なんだろうかこの違和感は？  
まさかっ！

「じゃあもう少し遊んでやろうつか、ねーーーー。」

案の定、霧ヶ峰先生は近接ブレードを呼び出すといきなり瞬間加速で接近してきた。

「へん、どひつむつかな？」

それを私は虚櫻でいなしながら呟く。ホントにどうじょうか、先生たちを倒せるかもしけない作戦を思いついたんだけどそれをどうやつてセシリアに伝えようか？

『戦場で迷つてたら死ぬぞ新兵《ルーキー》！』

「お母さんですわ！」

やつぱり霧ヶ峰先生の言ひとおり、セシリアに作戦を伝えてくるかなっ！！

「じゃあ頑張りますかねッ！-！」

私は小太刀『霧氷』(むひょう)を呼び出し霧ヶ峰先生を突き飛ばすと連続瞬間加速をしてセシリ亞に接近した。

「セシリアつ！！！」

「あ、秋奈さん？！どうしたんですの！？」

先生たちを倒せるかもしれない！！！」

「なんですか？」



## 第一話 唐突すぎる開戦（後書き）

薰「…………」

秋「お～い薰。タイトルホールはどうしたの？」

薰「いや、なんでもないよ、なんでもないんだ……」

「！」

秋「？まあいいか。皆さんつーづつ感想など、このパートナーの名前をじしどし募集中ですっ…よろしくお願ひします…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7620x/>

---

IS インフィニット・ストラatos 妹で介入？！

2011年10月26日18時23分発行